

まえがき

深刻な災害は根本的な問いを私たちに突きつける。今回の東日本大震災による福島第一原子力発電所の災害は、私たち人類のもっとも誇りとする“知”そのものにも問いをなげかけた。核エネルギーは、私たちの知の“最先端”のひとつであるからである。

「人間がこのような複雑にして高度なものまでつくれるなんて!」。それは人類の誇りであるはずなのに、地の底からの声として、「この知は信じてはいけない」という警告の声も私たちはつねに聞き続けていた。とりわけ、広島と長崎でおびただしい数の一般市民が一瞬にして犠牲となった事実を知っている私たち日本人は、地の底からの警告の声にもっと敏感であるべきはずであった。

けれども、私たちは「原子力の平和利用」というフレーズをなんども聞かされているうちに、原子力というのは、平和のために存在しているのだと信じるようになり、地の底からの声を騒音として処理してしまっていた。

人間というものはおもしろいものだ。深刻な原子力発電所の爆発被害から数年を経たいま、もう一度、「原子力の平和利用」を信じようとしている。このような信用の復活劇を、色々な分野、色々な地域で、私たちは歴史上、何度も繰り返してきた。そしてそれが悲劇の繰り返しになってきたことも知っている。

それにもかかわらず、その繰り返しを選ぶのが人間であるとしたら、この人間とはなんなのだという、やはり根本的な問いに私たちは直面する。

本書の対象とする川内村は、村の高所に登れば、爆発した原子力発電所群を遠望できるところにある。ひろびろとした青空には刷毛をはいたような白雲、その下に輝く碧い海、その手前の陸地のはじまるところに、白い近代的な建物群と白い塔と白と赤のまだら模様のクレーンが見えるが、それが破壊

された発電所である。

そこから、目に見えない放射能が川内村にも降りてきた。目に見えないから、川内村はどこも汚れていないし、破壊されていない。人間や鳥たちにも変化がない。原子爆弾が投下されたのとは大きく異なる。自然や家屋はそのままの姿なのである。

その後、示されたのは数値だけである。空間線量として、1.2 マイクロシーベルト ($\mu\text{Sv/h}$) というような数値が示されるだけで、実感は湧かないのである。しかし、ともかくも避難することになり、しばらくしてから、また、元の村に戻ってくることになる。本書は、避難開始前後から元の村に戻ってくることになるまでの、人びとの葛藤や決意の姿を示すことになる。

マスコミや知識人たちは、いまだ線量の高い地域に戻るとは、という批判の声を上げる。しかしながら、批判よりも考えて欲しい。そんなことは重々分かっていながら、なぜ、帰村をする決意をしたのか、その決意の意味はなんだったのか。

コミュニティ (村) が消滅していくのを避けるために戻ったのだ、というのも答えの一つである。けれども、答えの内容はもっと深い。その深さを、川内村の人びとの語りを通じて考えたいものだ。

人間というものは、自分だけのことを考えるほどに利己的ではない。そのことは本書の語りが示してくれるであろう。自分以外とは、もちろん家族や近隣の仲間が入るが、それ以外に、牛などの動物が入るし、自分たちの先祖が入る。それから田んぼや畑も自分たちの親しい仲間のようなものだと思込している。また自然の風景そのものさえ入るのだ。

帰る場所が危険なことは知っている。低レベル放射線の長期的な影響も避難生活のなかで学んでいる。けれども、川内村よりももっと北の漁村で話だが、東日本大震災の津波で村と仲間を失った漁民が、政府が推奨する高台に住まずに、ふたたび元の漁村に戻っていつている。危険なのを知っているが、漁民とはそういうものだ、彼らは漁村でのヒヤリングのときに私に答えてくれた。それは「勇気」ではなくて、「深い決意」のようなものである。

この川内村でも同様の「深い決意」が見える。この「深い決意」とはなんな

のであろうか。少なくとも言えることは、人間は危険からはつねに遠ざかるという単純な生き物ではなくて、危なくとも、ときには突き進んでいくべきと判断する生き物なのである。

本書は4部から構成されている。1部では、この福島県川内村の歴史や構造について述べている。それらの説明を通じて、川内村そのものの社会的特徴の理解を目的としている。2部では、住民一人ひとりの話をライフヒストリーの手法を使って、記録している。その語りから、人びとの戸惑いや決意や価値観を知ることができよう。2部は大きく避難の際の対応、帰村をめぐる判断、帰村後の生活再建という3つのテーマからなっている。これらが本書の中心である。3部では、震災への対応を地域のリーダーの目から、その見解を示してもらっている。いずれも2015年前後の状況を語ったインタビュー記録である。そして最後の4部ではこの原発災害の「年表」ならぬ「分表」を作成してあるので、ある事件や決断がどのような条件下のときであったのかを知る必要があるときにはここを参照していただきたい。

今から10年も経過すると、本書で記したような記録の再現は不可能になるであろうと想定した。記録の重要性を意識する本書は、最新の状況よりも、とくに2015年ごろまでの揺れ動く村の姿を記述することに力点をおいた。2016年6月31日に、川内村の避難指示は全面的に解除された。だが、本書の対象とする期間では、帰村と避難との間で葛藤し、二地域居住を続ける住民が多くを占めていた。

すなわち、かつてのチェルノブイリと同じ「レベル7」の原子力災害を、20キロメートルから30キロメートルという身近な距離で、川内村は経験した。このコミュニティの葛藤と決意の姿を仔細に示すことが本書の使命と考えている。

2017年12月

著者代表 鳥越皓之

目次/原発災害と地元コミュニティ—福島県川内村奮闘記

まえがき	xi
------------	----

第1部 災害の発生と川内村	3
---------------------	---

1-1 災害とコミュニティ	鳥越皓之 5
1 コミュニティとは 5	
2 三つの機能 6	
3 生産のためにはコミュニティは不可欠 8	
4 生活の場としてのコミュニティ 10	
5 地域コミュニティはつねに災害を念頭においていた 13	
6 震災研究での指摘 14	
7 川内村のコミュニティ 15	
1-2 川内村の歴史と地域コミュニティ	金子祥之 18
1 人びとを取り巻く構造の変容 18	
2 近世村落の成立 19	
3 近世の産業構造 21	
4 エネルギーの生産地としての川内村 23	
5 エネルギー構造の転換と原発誘致 25	
6 地域自治の枠組み—上川内と下川内 27	
7 行政区と8つのムラ 28	
8 ムラとヤシキー行政区と班 30	

第2部 住民一人ひとりが語る経験	37
------------------------	----

A 大災害からの避難

2-1 カタストロフィーと行政対応	金子祥之／話者：井出寿一 39
1 困難な決断の連続 39	
2 富岡町の避難者受け入れ 40	
3 「殉職」を覚悟した全村避難の決定 47	
4 福島県最大の避難所・ビッグパレット 51	
5 多くが去った村への対応 52	
6 帰村の方針への賛否—帰村宣言まで 55	

- 7 帰村へ向けての不安との闘い 60
- 8 「村のため」という判断基準 62
- 2-2 災害弱者の避難生活 …………… 金子祥之／話者：渡辺ヒロ子 66
 - 1 災害の衝撃と生活条件 66
 - 2 家族で支えた夫の病気 66
 - 3 地震と命拾い 68
 - 4 「避難の夜」の苦しみ 69
 - 5 避難という集団生活 71
 - 6 娘を頼る自主避難へ 72
 - 7 川内村への帰村と重なる死 73
- 2-3 支援が生み出す分断 … 金子祥之／話者：三瓶カツ子・大和田あけみ 77
 - 1 支援がもたらすもの 77
 - 2 散り散りになる家族―発災時のあけみさん 79
 - 3 発災時のカツ子さん 81
 - 4 夫の状況 82
 - 5 原発災害と千葉へ行く決断 83
 - 6 家族の再会と更なる避難 85
 - 7 初期避難を支えたもの―家族・親族関係 87
 - 8 「住むところ」を求めて―支援のもたらす葛藤 88
 - 9 県外避難の選択と情報格差 90
 - 10 帰宅と2つの被災者―支援のもたらす分断 92
 - 11 硬直化する公的支援 93
 - 12 支援の境界線―誰が被災者なのか 95
- 2-4 医療従事者の葛藤 …………… 野村智子／話者：井出弘子 98
 - 1 役場職員の夫婦 98
 - 2 地震発生直後―診療所での対応 98
 - 3 娘のいるさいたまへの避難 101
 - 4 ビッグパレットふくしま（郡山）へ 104
 - 5 家族の避難生活 106
 - 6 川内村診療所の再開 107
- 2-5 避難をしない選択 …………… 野村智子／話者：鈴木美智子 109
 - 1 商店経営の家族 109
 - 2 地震発生時の美智子さん 109
 - 3 1区集会所で避難者の支援 110
 - 4 避難しない決断 114
 - 5 留まったあとの生活 115
 - 6 川内村に残って得たもの 117

7 事故後4年半を経て 119

B 帰村と選択

2-6 帰村を促した要因 …………… 野村智子／話者：井出弘子 121

- 1 家族それぞれの帰村 121
- 2 お義母さんの病気 123
- 3 妹家族の出来事 125

2-7 帰らない理由と近隣関係 …………… 野村智子／話者：吉田悦子 127

- 1 避難指示解除準備区域の家族 127
- 2 川内村貝ノ坂地区 128
- 3 悦子さんの暮らし 128
- 4 悦子さんの避難－地震発生時の様子から 129
- 5 息子たちの避難－次男と四男夫婦 130
- 6 悦子さんの家と近所の人びと 131
- 7 ご主人とヤギ小屋 133
- 8 仮設住宅での生活 136
- 9 帰らない理由 137

2-8 三世代家族の分離 …………… 野村智子／話者：西山王子 140

- 1 震災以前の生活－三世代の同居 140
- 2 地震の発生時の王子さん 140
- 3 家族の避難と避難生活 142
- 4 王子さん夫婦の帰村 144
- 5 息子家族の生活 145
- 6 川内村の生活 146
- 7 ひとつの家族がふたつの家族に 147

2-9 子育て世代にとっての帰村 …………… 野田岳仁／話者：秋元活廣 149

- 1 子育て世代の抱える不安 149
- 2 責任感や義務感では帰れない 150
- 3 震災によって遅れた結婚 152
- 4 田植え作業を通じて感じた親の存在 154
- 5 子を守る親の責任 158

2-10 若者と再離村 …………… 藤田祐二／話者：山崎優也(仮名) 161

- 1 刻々と迫り来る放射能と仕事 161
- 2 震災直後の状況 162
- 3 避難地郡山市から帰村する決断 164
- 4 食べる物もガソリンもなく 166
- 5 復活した祭りの助っ人 168

- 6 除染の仕事と将来の不安 169
- 7 再離村と新たな挑戦 171

C 復興に向けて

- 2-11 コミュニティにとっての農業 …… 藤田祐二／話者：井出剛弘 172
 - 1 農業を続けること 172
 - 2 農地の放射能汚染と除染 175
 - 3 気力と体力減退という被害 178
 - 4 休耕田からの被害 180
 - 5 復興のために奪われた農地 181
 - 6 放射線量全袋検査と農業継続 183
 - 7 被害があっても農業を続ける 185
 - 8 働く文化と意味 187
- 2-12 除染を拒否した篤農家 … 野田岳仁／話者：秋元美誉・秋元ソノ子 190
 - 1 なぜ農地の除染を拒否したのか 190
 - 2 農地の放射能汚染 190
 - 3 前を向くために記録をとる 193
 - 4 目の前の農地を青くするために 195
 - 5 たい肥による土壌改良 196
 - 6 農地の除染の拒否 197
 - 7 農家にとっての生活再建とは 200
- 2-13 自然を離れて生きる … 金子祥之／話者：久保田安男・久保田キミエ 202
 - 1 平穏な生活の背後にあるもの 202
 - 2 仕事熱心な農家 203
 - 3 隣近所がいなくなる 204
 - 4 息子の家での避難生活 206
 - 5 避難時の気持ち 207
 - 6 ムラに帰村するまで 208
 - 7 農業をやらない決断 211
 - 8 「食い心」の悪さ 212
 - 9 消えた「ヤマの楽しみ」 214
 - 10 子供の生き方を決める 216
 - 11 廃炉までの作業を誰が担うのか 217
 - 12 一生を振り返って 219
 - 13 帰村者の抱える晴れない気持ちとは 220
- 2-14 復興政策と地域振興策の衝突 …… 藤田祐二／話者：新妻一浩 222
 - 1 政策の副作用 222
 - 2 放射能汚染と生活不安 222

- 3 帰村宣言への不信感 224
- 4 不安を抱えながらの暮らし 225
- 5 みんなの夢—ソバ栽培が軌道に乗るまで 227
- 6 ソバ栽培の困難—「ソバ畑が仮置場になった」 230
- 7 流通の困難—信頼できる測定 234
- 8 共同の困難 238
- 9 復興対策と地域に根差した産業 240

第3部 現状と将来に向けての対談

243

- 3-1 地元のリーダー・井出茂さんとの対談…………… 聞き手 鳥越皓之 245
 - 1 避難者がやって来る 245
 - 2 安全性と自分たちの避難 247
 - 3 村を離れる 251
 - 4 村に戻るか 254
 - 5 教育環境と教育についての考え方 256
 - 6 世代による考え方の違いと仕事 261
 - 7 山や自然 267
- 3-2 遠藤雄幸・川内村村長に聞く …………… 聞き手 鳥越皓之 271
 - 1 帰村して大丈夫か 271
 - 2 戻る人は戻ろう 274
 - 3 ソ連のチェルノブイリ原発災害との比較 276
 - 4 元の場所に帰りたいのか 279
 - 5 先祖から受け継いできた田や畑や森 279
 - 6 除染がはじまる 280
 - 7 きれいな農村・生産のサイクル 283
 - 8 汚染と商品価値 284
 - 9 村全体の避難 288
 - 10 震災の発生 291
 - 11 政府は安全だと言う 294
 - 12 帰村の実現と将来像 296
 - 13 村づくりをもう一度考える時間をもらった 298

第4部 資料編・川内村震災の記録

301

- 4-1 川内村震災の記録 …………… 303
- 4-2 2011 年作付け記録 …………… 343

4-3 診療所勤務記録	344
あとかき	347
執筆者紹介.....	349

原発災害と地元コミュニティ―福島県川内村奮闘記

鳥越皓之編



川内村の高所から望遠レンズで約 20 キロメートル先の福島第一原子力発電所を望む

東信堂

あとがき

本書は福島県川内村という、福島第一原子力発電所から遠くない距離に住む人びとから聞き取った、原発事故後の考え方や気持ちを収録した本である。

それらを聞き取った私たちの考えや立場はなるべく後方に置くように注意をした。けれども厳密に考えれば、「どんな問いを発するか」ということ自体、不可避免的に質問者の考え方や立場が出てしまうものである。結果的にそうなったとしたならば、同時代に生きる人間として、それはそれでよいと考えている。

この本ではライフヒストリーという方法を使っている。基本的には鳥越皓之『沖縄ハワイ移民一世の記録』(中公新書、1988)の手法に従っている。それは聞き取りをしたすべてを記録するのではなくて、映画監督がカメラで撮られた映像を自分で編集(切り捨てていく)をすることによって、全体像を象徴的にあきらかにする手法である。つまり、聞いた内容の一部だけを文字化することによって、逆に、とても印象深く、またその本質を理解できるという考え方に基づいている。ライフヒストリーの手法については、当時、私の先生である中野卓先生とハワイを共同で調査したときに議論した。中野先生は原則として聞き取りのすべてを文字化すべきであるという立場であった。

なおこの本は、鳥越とその教え子たちによってつくられた本である。鳥越の早稲田時代の最後の仕事がこれになった。メンバーは環境社会学研究室的院生のうち、このテーマに興味を示した野田岳仁、金子祥之と、通信教育で勉強をしていた藤田祐二、野村智子の両名である。かれらと私を含めた5人で、川内村研究調査のNGOを立ち上げ、お互いに勉強をした。

私はその後、兵庫県西宮市にある大手前大学に移り、時を同じくして野田君も京都の立命館大学に奉職したので、メンバーは関東と関西に分かれてしまったが、相互に連絡をとりつつ、調査とまとめの作業を継続した。私の印象では、藤田君と野村さんがとても頑張って作業をしてくれたように思う。

通信教育の学生はいわば「大人」の学生であり、両人は忙しい仕事のかたわら、大人の頑張りというものを示してくれた。

また、この本をまとめる間、直接の引用はしなかったものの、私は、西谷内博美・吉川成美訳、オリハ・ホリッシナ著『チェルノブイリの長い影』（新泉社、2013）を座右の書とした。この書は船橋晴俊さんが長を努めておられた法政大学サステナビリティ研究機構の翻訳プロジェクトによって作成されたものである。そして、船橋さん自身が解説を書いておられる。

個人的な感慨を述べることを許していただけるなら、1980年代のおわりごろ、飯島伸子さんと船橋晴俊さんと私の3人で、日本に環境社会学を立ち上げ、若い環境社会学者を育てようと誓った。だが、飯島さんは2001年に比較的若くして亡くなられ、船橋さんも2014年夏に急逝された。私よりも若い船橋さんへの弔辞を私が述べるはめになってしまった。

学問というものに、社会に貢献する役割があるとしたら、環境社会学もその一翼を担っているはずである。お2人のこの分野での貢献の偉大さに比べて、残された我が身の頼りなさを恥じるのであるが、この本は、お2人の精神を引き継がねばならないという気持ちでまとめたところもある。

本書には巻頭や本文中に多くの貴重な写真を掲載することができた。とくにお世話になった川内村役場、西巻裕さんのご協力に感謝申し上げる。また巻末には、「年表」ならぬ「分表」が掲載されている。日・時・分ごとの地元コミュニティの住民の対応を今の時点で記録しておかなければ、それは永遠に消滅してしまうだろうことを恐れてである。この分表も含めた煩雑な記録を本書に含ませることを快く承認してくださった東信堂の下田勝司社長に心からお礼を述べておきたい。

最後になったが、聞き取りに協力してくれた川内村の方たちに、大いなる謝辞を述べておきたい。また、その未来が明るいものとなることを切に祈るばかりである。

執筆者紹介（執筆順）

鳥越 皓之（編著者、奥付参照）

金子 祥之（かねこ ひろゆき） 日本学術振興会特別研究員 PD、立教大学。

主要業績：

「原子力災害による山野の汚染と帰村後もつづく地元の被害—マイナー・サブシ
テンスの視点から」『環境社会学研究』(21)、2015

「村落相互の対立と水害の分配—災害のもたらす被害から受苦へ」植田今日子編
『村落社会研究第 51 集 災害と村落』農山漁村文化協会、2015

野村 智子（のむら さとこ） 早稲田大学人間科学部通信教育課程（e スクール）卒業。
元シティバンク銀行勤務。

藤田 祐二（ふじた ゆうじ） 早稲田大学人間科学部通信教育課程（e スクール）卒業。
現在、医療法人社団翔未会、株式会社エム・ティー・エイチ勤務。

野田 岳仁（のだ たけひと） 立命館大学政策科学部助教。

主要業績：

“Why do residents continue to use potentially contaminated stream water after the nuclear
accident? A case study of Kawauchi Village”, Yamakawa Mitsuo and Yamamoto Daisaku(eds),
Rebuilding Fukushima, Routledge press. 2017

「コミュニティビジネスにおける非経済的活動の意味—滋賀県高島市針江集落に
おける水資源を利用した観光実践から」『環境社会学研究』(20)、2014

編著者紹介

鳥越 皓之(とりごえ ひろゆき) 大手前大学学長。

関西学院大学社会学部教授、筑波大学大学院人文社会科学研究科教授、早稲田大学人間科学学術院教授を経て、2016年4月より現職。

専門：社会学、民俗学、環境問題、地域計画。

主要業績：

『トカラ列島社会の研究』御茶の水書房、1982

『家と村の社会学』世界思想社、1985

『沖縄ハワイ移民一世の記録』中央公論社、1988

『地域自治会の研究』ミネルヴァ書房、1994

『環境社会学の理論と実践』有斐閣、1997

『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会、2002

『花をたずねて吉野山』集英社、2003

『環境社会学』東京大学出版会、2004

『サザエさんのコミュニティの法則』日本放送出版協会、2008

『水と日本人』岩波書店、2012

『琉球国滅亡とハワイ移民』吉川弘文館、2013

コミュニティ政策叢書 3

原発災害と地元コミュニティー福島県川内村奮闘記

2018年 1月 30日 初版 第1刷発行

[検印省略]

定価はカバーに表示してあります。

編著者◎鳥越皓之／発行者：下田勝司 印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替00110-6-37828
〒113-0023 TEL (03)3818-5521 FAX (03)3818-5514

発行所
株式 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.
1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan
E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1425-1 C3036 ©Hiroyuki Torigoe